

# 青森県における生殖器崇拜資料

増田 公寧<sup>1)</sup>

Data for a study on Phallicism in Aomori pref.

Kimiyasu MASUTA

Key words: 生殖器崇拜、性崇拜、性神、コンセイ（金精、金勢）、道祖神

## はじめに

東北地方にみられる民俗神のなかで、「コンセイ」（コーセン、コーヘン、コンヘ、コーセイ）とよばれる神は、その外面的な形態から、一般的には生殖器崇拜<sup>2)</sup>の対象（性神）として認識されてきた。この神は、「テンマ」、「ホウリョウ」、「ウンナン」、「ソウゼン」、「ランバ」、「ニワタリ」等、中世以前の古い時代の信仰に由来するとされる神々とともに、その正体が曖昧な民俗神のひとつであり、単純に生殖器神として位置づけることは難しい。しかしながらその神体あるいは奉納物の多くは、男根を象徴する形態をとり、一要素として生殖にかかわる信仰があると考えられることは可能ではないかと思われる。今回とりあげる生殖器崇拜資料は、「コンセイ」に代表されるように、性格はあきらかではないが、少なくとも神体あるいは奉納物が生殖器を象徴する形態をとる物質的な資料としたい。

ところで、「コンセイ」神について青森県内の事例を取り上げた記録をふりかえると、古くは近世後期に著された複数の文献に記述がみられる。もっとも多く取り上げられているのは、「奥州南部領三戸岡山」<sup>3)</sup>の「金精神」であり、菊岡沾涼『本朝俗諺志』（延享3・1746）、木内石亭『雲根志』前編（安永2・1773）、工藤白龍『津軽俗説選』（寛政2・1790～寛政7・1795）の3文献はともにほぼ同じ内容を伝えている<sup>4)</sup>。ほかに、『津軽俗説選』には「碓ヶ関」の「金勢大明神」についての記述がみられ<sup>5)</sup>、村林源助『原始漫筆続編年表』巻之七ノ四十、文化7（1810）年の項には「天下森」に創建された「金精祠」について記されている<sup>6)</sup>。

「コンセイ」以外に、男根形の祭祀についての記録がみられるものをあげると、根岸鎮衛『耳袋』（天明2・1782頃～文化年間）には「津軽の道中」に「カナマラ大明神」という黒銅製の男根があるとの記述がある<sup>7)</sup>。また、菅江真澄は『外ヶ浜つたひ』『津軽の奥』『雪のもろ滝』『おがらの滝』『おぶちの牧』に、それぞれ現在の青森市、東津軽郡平内町、西津軽郡鱒ヶ沢町、同郡深浦町、下北郡東通村における男根形の祭祀を記録しており<sup>8)</sup>、喜多村信節『画証録』（天保10・1839年）には「関といふ処の寺」に「長四尺余の銅像」（男根形）があるという記述がある<sup>9)</sup>。いずれも神体あるいは奉納物の形態について男根形であることは明らかであるが、呼称については「カナマラ」「金玉茎大明神」「天魔」等さまざまである。

これら男根形を神体或いは奉納物とする信仰をめぐっては、明治5（1872）年から始まった淫祠邪教を戒める法令の施行により、淫祠の代表的なものとしてされたために、次第に民衆のなかにもこれをまつる行為について淫猥であるとみなす道徳観が一般化されるにつれ、表向きには生活のなかから排除されていったという経緯がある。偏在する「あたりまえのもの」から、「あたりまえでないもの」への変容は、対象として定立され、問題として考慮される契機にもつながったのであり、大正期に入ると、失われつつある信仰を土俗学的な視点から取り上げる研究者がみられるようになった。たとえば出口米吉や齋藤昌三はその著作のなかで全国各地の事例を記しており、それには青森県内の数例が含まれている<sup>10)</sup>。また、横山流星は、生殖器崇拜を邪教であり迷信であるとする「啓蒙」的な立場から国内各地の事例を取り上げているが、その中に青森県内の事例も少ないながら含まれている<sup>11)</sup>。昭和に入ると『郷土趣味』誌上において、齋藤昌三や田中緑紅が青森県内の事例について記している<sup>12)</sup>。これらの文献には、現在ではその痕跡すら失われてしまった事例も含まれており、貴重な資料であるといえる。

このように、「コンセイ」をはじめとする生殖器崇拜についての研究が大正から昭和初期にかけて興り、ひきつづいて、西岡秀雄や伊藤堅吉らによってさらに多くの資料についての整理と検討が進められた<sup>13)</sup>。なかでも形態や機能の面で生殖器崇拜としての側面を、場合によっては持ちうるといえる「道祖神」については、柳田國男が『石神問答』において民俗学の研究対象としてとりあげて以来、多くの研究者らによって研究の方向が示され膨大な成果の蓄積がおこなわれている。ただし、こういった過去の研究成果のなかでも、こと青森県についてみると積極的に取り上げられる機会はそれほど多くはなかったと思われる。

1) 青森県立郷土館 研究員（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

ここでは、青森県内における生殖器崇拜の事例を多くあつめ、それらを比較検討することにより、県内における「コンセイ」をはじめとする生殖器崇拜についての傾向や特徴の有無について検討することを初期の目的としたい。以下に記すのは、そのための基礎資料である。

## 青森県内における生殖器崇拜資料

資料は、青森県を6つの地域にわけ、A、東青、B、西北五、C、中弘南黒、D、上十三、E、三八、F、下北（但し、六ヶ所村・横浜町を含める）の順に記した。各項目タイトルに付属する番号は通し番号（英数字）とし、番号、所在地、「祭祀物の呼称」、(材質と形態)の順に記した。また、出典の注記がない内容については筆者の取材による。

### A、東青

#### 1. 青森市諏訪神社「猿田彦神」（石製男根）

「陸奥青森市諏訪神社境内に猿田彦神と云ふてゐる陽石があるが頭部が半分欠けてゐる、水谷泰夫氏の談である」との記述がある<sup>14)</sup>。青森市花園にある諏訪神社には、猿田彦を祀る祠が複数存在するが、神主に尋ねたところ、そのような石体は存在しないとの回答であった（2007年7月）。出典には青森市諏訪神社としか述べられていないので、花園の諏訪神社とは別の神社であるか、もしくは失われてしまったのかもしれない。

#### 2. 青森市酸ヶ湯温泉「湯の神」（木製男根）

酸ヶ湯温泉の「湯の神」は、「まんじゅうふかし」に對面する小祠に祀られている。祠内には長さ約1mの巨大な木製男根から、女性の神像まで、さまざまな意匠の性的奉納物がみられる。祠の脇には「金精水」と名付けられた清水がわき出ている(2006年6月)。

酸ヶ湯温泉の「湯の神」に奉納された木製男根については、昭和7(1932)年発行の雑誌に「明らかに木偶であつてこけしに彩色をしない許りの相異である。昔はこれを湯槽の中に浮かしてみたもので子無き者此の道祖神を以て腹部をさすれば子を得ると信ぜられてゐたと云ふ」という記録<sup>15)</sup>があるが、現在ではそのような奉納物は見あたらない。こけしと男根の関係については、性的玩具としての意味をそこに見出すものと、それを否定する論があるようだが<sup>16)</sup>、たとえば鳴子温泉（宮城県大崎市）の道祖神祠には、現在でもこけし制作技法による木製男根が多数奉納されていることから<sup>17)</sup>、その起源はともかく、こけしが男根としての意味を付与され用いられる場合が存在することは事実である。酸ヶ湯の場合、近隣の温湯温泉（黒石市）が、こけしの生産地であり、往時は遊女たちが千客万来を願ひ、こけしを男根にみだてて「来なければ川に流してやるぞ」というまじないを行っていた<sup>18)</sup>というから、酸ヶ湯の湯の神に奉納されていた「こけしに彩色しない許り」の木製男根は、あるいは温湯製のものであったかもしれない。

ちなみに、酸ヶ湯温泉の売店では「魔除け飴」と称して、男根型の飴を販売している<sup>19)</sup>。

#### 3. 青森市孫内淡島神社「ゴゲンサマ」（石製男根）

「孫内のアワシマサマ」として知られる神社である。『津軽口碑集』に、社殿の中央に陽物が据えられ、妊婦が参詣しているとの記述がみられる<sup>20)</sup>が、現在ではそれらしきものは見あたらない。神社を管理するG氏によると、「ご神体」は扉の奥に秘蔵され、部落でも実際に見た者はいないとのことである(2006年8月)。神体とは別に保管してある、長さ30～40cmほどの細長い石（約10本あり、それぞれに着物が着せてある）を借り、抱いて寝ると子宝に恵まれるといわれ、願ひが叶った場合には倍返しすることになっている。

淡島神社はもと法量宮と呼ばれ、「法量権現」を祀っていた。お産のまじないとして、参拝時にともしたロウソクが用いられるが<sup>21)</sup>、小池淳一によれば、火との関係から、修験系もしくは密教系の儀礼との関係が想起されるという<sup>22)</sup>。祭日は4月14日である。

#### 4. 青森市東岳・「ゴリンドウ石」「コンヘサマ」

東岳の中腹、ゴリンジャという沢に「ごりんどう石」と呼ばれる陰陽石が祀られており、お産の神として信仰されている。「コンヘ様」とも呼ばれている<sup>23)</sup> <sup>24)</sup>。

5. 青森市矢田・長森部落「コンセイサマ」

長森部落裏手の山道に、金精様のお堂があり、新旧さまさまの金精様が祀られているという<sup>25)</sup>。

6. 青森市後潟・木の宮様山神古宮

子宝が欲しい人の信仰の対象となっている御神体がある<sup>26)</sup>。奉納物のなかには、男根形のものもみられる(2011年1月)。

7. 青森市浪岡・賽の河原(石棒か)

大釈迦駅北方2kmの小高い丘の上に、地藏を祀るお堂があり、堂の手前の松の木の根元には小石がうず高く盛られている。お堂の内部には、中央に大きな地藏が1体、その左脇に5体の小さな地藏が祀られ、右脇の小祠の中に、男根型の石が安置されている(2005年8月)。石棒と思われる。

8. 青森市浪岡・宝龍大権現(石棒)

神体として、近くから出土した石棒を祀る。お産の神様として信仰されており、古くは「法量宮」と呼ばれていた。馬馬の上に権現様(獅子頭か)が祀られている。境内には占いをする池がある<sup>27)</sup>。以上の状況は、孫内の淡島神社と酷似している。

9. 平内町盛田「石神」(自然石)

『平内町史』に、崇拜の対象となっている石のひとつとして、写真が掲載されている<sup>28)</sup>。10個あまりの石体がお堂の中に安置されていて、なかには男根をイメージさせるものもみられる。

10. 平内町狩場沢・熊野宮「コンセイサマ」(木製男根)

「金精(金勢)さん」と呼ばれ、古くは南部地方からも信仰をあつめていたといわれる<sup>29)</sup>。社殿わきの小祠には、直径50cm・高さ1mほどの太く短い木彫りの男根形奉納物が納められている(2006年7月)。以前は木製石製の奉納物が多数みられたようである<sup>30)</sup>。また、社殿の裏手には2本の長い石が据えられ、そのうちの一本は刀のように鋭く反り返り、高さは身の丈ほどもある(2006年7月)。菅江真澄は『津軽の奥』の中で、狩場沢に「菅大神」の小さな祠があり、陰陽石、雷斧石、雷槌石などという変わった形の石が奉納されていると書いている<sup>31)</sup>が、古来、石鍬や石斧を、霹靂石、雷の爪、雷椎、雷太鼓の撥などといって雷神と関係づけて祀ることもあるので、社殿裏手の長い石はこれにあたるかもしれない。また、陰陽石が祀られていたということからも、現在の熊野宮に祀られるコンセイサマとの関係が疑われる。ただし、「菅大神」の祠であることから、あるいは県南にみられる「テンマサマ」としての陽物奉納であった可能性もある。同じく菅江真澄の『外ヶ浜づたひ』には、狩場沢の村はずれの祠に男根の形をした石が祀られているとの記述があるが<sup>32)</sup>、これについても現在の熊野宮に祀られる「コンセイサマ」との関連を考えることができる。

ところで、坂本吉加『津軽の伝説』では、この狩場沢の「コンセイサマ」を、『耳袋』に登場する「かなまら明神」ではないかとし、「今のところ、有力な候補地と考えられるとは思う」、「(狩場沢の熊野宮に)黒銅の記念碑を建て、長く人々の記憶にとどめたいものと思った」と述べている<sup>33)</sup>が、「かなまら明神」は果たして狩場沢の「コンセイサマ」のことであろうか。『耳袋』では「津軽の道中に」とあるだけで、明確な場所は記されていない。

B. 西北五

11. 五所川原市前田野目「アワシマサマ」(石、木製男根)

前田野目の須恵器窯跡群から鞠ノ沢沿いに林道を奥深く入った地点(地藏沢)に5m以上あろうかと思われる長大な石体がある。

古くは沢の上に地藏堂があつて、そこから現在の場所まで地藏尊が転げ落ち、「転び地藏」として信仰されるようになり、また付近の沢を「地藏沢」と呼ぶようになったが、昭和初期にその「地藏」を掘り起こそうとしたところ、地藏ではなく「巨大な陽物」であることがわかったという。根元には陰囊を彫刻した線もあるとされる。また、梵珠山の松倉神社登山口付近にある「胎内くぐり(鼻潜り岩)」が、この陽石と対をなしているといわれ、昔は地藏沢から胎内くぐりまで直通の小径があったという<sup>34)</sup>。昭和5年に東奥日報社発行の『サンデー東奥』に紹介されてからは、子宝の神として一躍有名になり、県内外から多くの婦人が訪れるようになった<sup>35)</sup>。

現在、この「巨大な陽物」には紅白の布がかけられており、そばに小さな祠がある。中には金色の男性器型奉納物（木製）が2体祀られている（2011年6月）。

地蔵が転げ落ちた際に、うなり声をあげたという伝説がある<sup>36)</sup>。

#### 1 2. 五所川原市狼野長根（木製男根）

津軽富士見ランドホテルに併設された拝殿（長生殿）中央に鎮座する、全国屈指の大きさを誇る木製男根彫刻で、普通家屋の2階ほどの高さがある。支配人によれば、今から40余年ほど前、前田野目にある淡島様にあやかり、ホテルの名物として作られたものであるという（2006年7月）。

#### 1 3. 鱒ヶ沢町細ヶ平・宰神社（石製男根）

近年建てられたらしい御堂の奥に白い垂れ幕があり、中央に石碑があつて、その両脇に3～4本ずつの石棒が祀られている。どれも大きく、太いものばかりである（2008年10月）。『鱒ヶ沢町史』によれば、昭和40年代頃には、これが10数本並んでいたといわれる<sup>37)</sup>。

「男の（筆者注：男性の性に係わる）神だと聞いたことはあるが、特に何の神とって拝んでいるものでもない。子供のころは、2本の石が祠の中に立っていて、祠のまわりにも石が何本もならべてあつた。ちょうど裏の山にのぼるための近道であつたので、山に行くときは通つたものだ。女性による信仰がどちらかといえば盛んなようだ。組石の洞も、子供のころからあつた。その中にある狛犬の頭は、最近奉納されたものだ。祭は上の（前同：細ヶ平字野山部落のこと）稲荷と一緒に7月29日におこなっている。神楽を催す。くわしいことはおばあさんたちの世代でないとわからないだろう。」（昭和23年生まれ：Y氏）とのことである（2008年10月）。

菅江真澄は寛政8年に細ヶ平を訪れ、稲荷の祠がある場所の崖下に「幸神」として石製男根が祀られていることを記録している<sup>38)</sup>が、これが現在の宰神社に奉納された石製男根と同じものである可能性がある。

#### 1 4. 鱒ヶ沢町・白八幡宮「比羅夫石」（石製女陰）

「比羅夫石」と称され、阿倍比羅夫が腰を掛けて休んだとされる。直径50cmほどのいびつな円形の中央にくぼみがあり、シダが生えていて、ちょうど女陰のようにみえる。果たして、これと対になるべき陽石が存在したか、或いは陰石だけであつたかはわからないが、いずれにしる県内に陽石は数多くあれど陰石の存在は珍しい（2008年10月）。

ちなみにこの神社は船絵馬で有名である（非公開）。また、北陸の船乗りの信仰が篤く、玉垣は福井県の笏谷石を利用して作られたものである。

#### 1 5. 深浦町大間越（石製男根）

古くは藩境を挟んでそれぞれ一社ずつ「御境明神」が建てられており、青森県側には現存しないが、秋田県側の御には現在でも「ホド様」が祀られているという<sup>39)</sup>。菅江江真澄『おがらの滝』には、関所の荒垣の外に男根型の石が立ち、産土神として漁師たちの信仰の対象となっているという記述があつて、真澄は「道祖神であろう」と記しているが<sup>40)</sup>、これが「御境明神」のことである可能性もある。

#### 1 6. 深浦町鱸作（石製男根）

月夜見神社の社殿右側に、縄文時代の石冠のような形をした石が祀られている<sup>41)</sup>。

### C. 中弘南黒

#### 1 7. 黒石市・青荷温泉（木製男根）

かつて、青荷温泉の「龍神の湯」には、木製の男根が浮いていたそうである。宿の主人によると、腐ってしまったので廃棄し、現在は浮かべていないとのことである（2006年）。

#### 1 8. 田舎館村・場外馬券売り場付近路上（石製男根？）

藤崎町から黒石市に向かう旧道沿いの一面に、石碑群があり、それに混じってコンクリートの土台に高さ20cmほどの石が据えられている。自然石か加工したものかは判然としないが、亀頭状の輪郭もみられ、全体として男根を想記させるものである（2006年8月）。

19. 弘前市新寺町・貞昌寺墓地（石製男根）

昭和初期には、高さ80cmほどの石製男根が祀られていたらしいが、現在は不明である。境内の個人の墓地に、夫婦の墓に挟まれるような形で存在したといわれる。墓碑として用いられたものではないという。このほかに、これも墓とは関係なく、1基の石製男根があったという<sup>42)</sup>。住職によると、「現在もその家の墓はあるが、当時の墓石等を埋めて新しく建て直したものであって、いつ埋めたのかはさだかではない。昭和39～40年頃にはすでになかった。建てた人は男性で、遊郭へよく遊びに出かけた人であるということも聞いている。」とのことであった(2009年9月)<sup>43)</sup>。

20. 弘前市西茂森町・勝岳院墓地（石製男根）

昭和初期に、石製男根が祀られていたようである。墓碑ではなく、墓域内に建てられた「好色なる女人の遺言による供養物」であったとされ、所有者は遊郭の関係者であったらしい<sup>44)</sup>。

21. 平川市碓ヶ関・愛宕宮（木製男根、神体は非公開）

碓ヶ関の川沿いの民家の裏に、近年新築された愛宕宮の社殿がある。内部に、木製の睾丸つき男根像（高さ1m）が安置されており、これは現在社を管理されている方の先代が彫刻したものである。御神体は扉の奥に秘められており、見ることはできない。社殿を新しくした際にも、子孫ですら神体を直接見ることはなかったとのことで、神体がどのようなものであるかは知ることができない。(2006年10月)

22. 平川市碓ヶ関・「かなまら大明神」

『津軽俗説選』によると、碓ヶ関の民家の背後に金勢大明神の祠があつて、俗に「かなまら大明神」と呼ばれているとの記述がある<sup>45)</sup>。「かなまら大明神」といえば、『耳袋』に、陰歯によって男根を食いちぎる話が描かれているが、歯を打ち砕いた黒銅製の陽物がのちに「かなまら大明神」とよばれ、御神体として「津軽の道中」に祀られたと記されている<sup>46)</sup>。県下において「かなまら」という神名は一般的でないことから、碓ヶ関こそが、『耳袋』に描かれた怪談の舞台かもしれない、興味深い。また、『画証録』によると、弘前から東に六里ほどの「関」というところの寺に、長さ四尺余りの銅製男根があるとの記述があり<sup>47)</sup>、或いはこれが『耳袋』に描かれた「かなまら大明神」である可能性もある。いずれにしても、その所在は明らかでない。

D, 上十三

23. 十和田市法量・法量神社（石製男根・女陰）

法量地区では法量神社、奥瀬は新羅神社、沢田は館八幡宮をそれぞれ、産土神として信仰している。以下に記すのは2009年10月に法量部落に住むH家の当主、S・H氏より聞いた内容である。

法量神社から田を挟んで50mほどのところに位置するS・H宅は、H家の本家で、もとは奥の山手にあり、「上の山（うえのやま）」という屋号で呼ばれていた。しかし火災により、明治8年に現在地に下り、茅葺きの屋敷を再建した。その後昭和40年にトタン葺きの家屋を建築し、現在に至る。住居の奥の間の神棚にさまざまな神を祀っている。以下に、祀られている神々について記すと、(1)神棚の一等左には十和田神社等の札がある。ただし、これは参拝の折りに授与されたもので、法量では十和田様といって信仰している対象はないという。(2)その隣のガラスケースの中には、黒塗りの獅子頭とホラ貝が安置されていて、「ゴンゲンサマ」と称して拝んでいる。これは明治中頃～昭和20年頃まで、法量神社にあったものであるが、その頃イタコに戦没者についてホトケオロシをお願いしたところ、聞いてもいないのに、法量神社のゴンゲンサマについて「参拝に人が訪れることもなく、供え物もなく、神様も腹が減るので、いつも拝んでもらえるような場所＝家に祀るように」とのお告げがあり、S・H家で祀るようになったのだという。また、当時は若者たちの遊びといえばバクチであり、健全育成のためにも獅子舞を習わせてはどうかという提案があり、洞内地区から指導者を頼んで、H家で稽古が行われるようになった。そのため、獅子舞の烏帽子や衣装、太鼓などもH家に保管してある。古くは旧暦正月5日に舞ったものであるが、現在では新暦1月2日に法量地区80戸を「カドウチ」してまわるといふ。また、本年（2009年）より十和田市秋祭りに獅子頭を貸し出すことになったという。(3)その隣には鉄の刀があり、「八幡様」として祀っている。(4)その隣の小祠には、紫色の布に包まれたご神体があり、「オホウリョウサマ」と称して祀っている。神体は木造で、両手をあわせるオカメのような女性が竜に乗っている構図である。神棚に掲示されている説明書きには「高麗神」と書かれ、S・H氏は「タカオノカミ」と呼んでいる。(5)その右となりに「明神様」を祀る。これは水の神だといふ。現在、法量地区で法量神社境内の湧水を生活用水として用いているのは、S・H宅と親戚のT・H宅の2軒のみであるとのことであった。水の神は「トワダサマ」

とはいわず、あくまで明神様であるという。(6)右手の神棚は、天理教の神を2柱まつり、明治42～43年ころから祀り始めたものであるという。

ちなみに、S・H宅では「コーヘンサマ」は祀っていない。あくまで法量神社境内にあるものであって、H宅とは無関係とのことである。ただし、「コーヘンサマ」の祠に奉納してある幣束(飾り付き)は、S・H氏の手になるもので、「コーヘンサマ」には「金」、「コヤスサマ」には「子」の字をあしらっている。法量神社境内の「コーヘンサマ」は自然石のものが複数祀られており、傍にある凹みのある石は「コヤスサマ」であるという。古くは銀杏の木の根元に水たまりがあり、そこで占いをしたという。

#### 24. 十和田市奥瀬・猿倉温泉(石製男根)

猿倉温泉の女性用露天風呂の傍らに、男根像が祀られている。

#### 25. 十和田市法量・谷地温泉(木製男根)

温泉裏手、薬師如来を祀る堂に、大小およそ20の木製男根および石製女陰、大小の奇岩怪石が奉納されている(2008年10月)。

#### 26. 十和田市笹畑「テンマサマ」

#### 27. 十和田市白上「テンマサマ」(石棒)

#### 28. 十和田市柏木「テンマサマ」

#### 29. 十和田市相坂「テンマサマ」

#### 30. 十和田市小山「テンマサマ」

#### 31. 十和田市藤島「テンマサマ」(石棒)

十和田市内に点在する「テンマサマ」については、『十和田市史』に6ヶ所が挙げられているが48)、いずれも現状は明らかでない。

#### 32. 十和田湖町三日市「国明観音堂」(陰陽石)

陽石を持ち上げ、陰石に差し込むと子宝が授かるといわれる49)。

#### 33. 三沢市・古牧温泉「古牧根精大明神」(石製男根・木製男根)

#### 34. 同所「淡島明神」(石製女陰)

カッパ沼のほとりに、三つのお堂が安置され、中央に「根清大明神」、右となりに「淡島明神」を祀っている(2007年7月)。説明書きによれば50)、「根清大明神」はもと七戸城の稲荷神社前にあったものを遷したといい、「淡島明神」は七戸町西野(せいの)の、N家より遷したものであるという。また、「根清大明神」は鎖で縛られているが、これは七戸城下の女性に夜な夜なイタズラをしたために付けられたものであるとされる。

この伝説は岩手県の巻堀神社に伝わる伝承と同話であり、あるいはそれ伝播したものかもしれない。

#### 35. 七戸町影津内「コンセイサマ」(石製男根)

七戸町役場商工観光課より情報をいただいた。県立郷土館発行『青森県の民間信仰』には、七戸町に高さ50cmの石製男根があるとの記述がある51)が、あるいはこれか。

#### 36. 七戸町和田・個人宅(陰陽石)

七戸町の個人宅に、陰陽石を祀る家があるという52)。

#### 37. 七戸町川向(石製男根)

川向の祠堂の跡地に、陰陽石らしきものがあり、古くは金勢大明神の祠があったとされる。男根をあらわした石像があったが、現在は小川原湖歴史民俗資料館に収められているという53)。

#### 38. 七戸町寺下「風の神」(石棒)

寺下地区では、風の神と称する石棒を祀っているという54)。

### 39. 七戸町上田「サイノカミ」と「道祖神」(神体不明)

登山口付近に「サイノカミ」の祠があり、そばに「道祖神」の石碑が祀られている。「カギカケ」の習俗がある<sup>55)</sup>。

### 40. 東北町宇道坂・塞神神社(石製男根)

御堂のそばを旧道が通っており、古くは交通の要衝であった<sup>56)</sup>とされる場所に祀られている。

以前は集落の3軒で祀っていたが、管理をしていた老人が亡くなり、その妻も病院通いとなって転居したため、現在では塞ノ神部落は2軒しかなく、主だてて祀る人はいなくなった。「何の神であるかは意識していない。部落の守り神であると思っている(集落の婦人)」とのことである。2軒で、4月と9月の25日に拝みに行っているという。

近年になって新築されたと思われるお堂は、正面に扉が2つあり、右の小部屋に塞の神、左の小部屋に龍を背負った老人の木像を祀っている(2008年11月)。

### 41. 東北町上清水目・上清水目天満宮「コーヘンサマ」(石製男根)

上清水目天満宮は、部落のオオヤであるH・S家が管理しており、社殿前の陽石は祖先が子孫繁栄を願って奉納したものであるとされる<sup>57)</sup>。陽石は全部で5本あり、穴のたくさんあいた大きな石体の前に立てかけるようにして祀られている。

近くの住民によると、「コーヘンサマとって拝んでいる。特に何の神様とって拝むわけではない。学問の神様を祭っているとは聞いている。安産や子宝であれば狩場沢にお参りに聞いている。縁日は25日で、村の百姓だけが集まる祭り、村全体が集まる祭り、などいろいろとやっている。祭りのときは500円ずつ出し合って、お祭りをしている。たまに石棒の前に小銭が置いてあるのを見るので、信仰している人があるのかもしれない。」(藤崎町から嫁いだ婦人、S氏)。「何の神様だか知らないが、天神様とって4月と9月の25日や、正月の年越しや、二百十日に祭りをしている。」(近くのK商店に集まった婦人5名による)、とのことであった。すでに年配の方ですら詳しいことを知る人はないようであった(2008年11月)。

現在では「コーヘンサマ」と呼ばれているようだが、天満宮にまつられていることから考えると、「テンマサマ」を祀っていた可能性も考えられる。

### 42. 東北町野田頭・個人宅「子安さま」(鉄製男根)

長さ11cmの鉄製で、タワシでこすったり握ったりすると御利益があるという。N家の子安さまは、「テンニャグバサマ」であった故・T・N氏が祀っていたもので、銅製の不動明王像と、鉄製男根をともに子安さまとして祀っていたという<sup>58)</sup>。

### 43. 野辺地町馬門・馬門山上(石体)

『津軽口碑集』に、「まかど山」の山上に子授けの石体があると述べられているが<sup>59)</sup>、どのような石体かはつまびらかでない。「馬門山」と呼ばれる山は、一般に、まかどスキー場付近の山(標高181m)を指すようである。営林署の図面<sup>60)</sup>によれば、馬門山はちょうど馬門スキー場のリフト終点がその頂上にあたる。しかし、スキー場を管理する方々にも話を伺ったが、石体は見たことがないとのことであった(2008年11月)。仮に馬門山が烏帽子岳のことであるとしても、烏帽子岳の頂上にあるのは山の神の祠であり、「馬門山上の石体」なるものの存在はいまもって不明である。ちなみに『津軽の民間信仰』(1980)にはそれが現存する旨、記されている<sup>61)</sup>。

### 44. 野辺地町愛宕公園・「コンセイサマ」(石製男根)

野辺地町を描いた江戸時代末の絵図<sup>62)</sup>に「イナリ」「アタゴ」とともに「コンセイ」の小祠が記されている。現在は、愛宕神社の境内にある稲荷の祠の中、稲荷の御神体の右脇に、高さ50cm、直径30cmほどの石製男根が安置されているが、嚴重に鍵がかけられており、年に2回、5月3日と9月23日にのみ、開帳される。管理は野辺地町の神明宮の宮司がおこなっている。宮司によれば、愛宕神社ではカグツチノカミとウカノミタマノカミを祀っており、「コンセイサマ」とは直接的な関係がなく、ゆえに近年になって祀られたものではないか、とのことであった(2008年11月)。

### 45. 野辺地町金沢・「イシガミサマ」(石製男根?)

下北半島へ向かう国道沿いに古びた鳥居があり、表面に穴が多数開いた大きな石を囲むようにして、細長い石や丸い石が大小60本あまり添えられており、「イシガミサマ」と呼ばれている。この神を管理するU氏によると、「昔は3月27日の祭礼の日に、持ち回りで当番の家が、大根とにんじんのなますや大根汁、しとぎ餅などを作り、お供えを

したものだが、現在ではめいめいが拝んでいる程度である。昔はこの集落のはずれがこのあたりであり、病気やわざわいが集落に入らないように守ってくれる神であると聞いている。『イシガミサマ』と呼んでいる。大きい石が母親で、そのまわりに奉納されているのが子どもである。女の神様を祀っている。大きい石は、昔はもっと大きかったが、風化して小さくなった。もともと、浜町のU家で漁の網にかかって上がった石で、夢のなかで岡に祀られたいとお告げがあり、ここに祀るようになったという。近年、子どもがバスのタイヤにぶつかったり、子どもが自転車で車に衝突したりする事故があったが、いずれも大事には至らず、これも『イシガミサマ』のご加護であると信じている。北海道大学の民俗関係の学生が研究に訪れていたこともあった。特に安産や子授けの神というよりも、集落の守り神として信仰している。」とのことであった(2008年11月)。

また、近所に「石神裏」という地区があるが、そこに住んでいる老婦人に尋ねても、「イシガミサマ」のことは知らないようであった。

## E, 三八

### 4 6. 八戸市小中野・J寺(石製男根)

花街として有名な小中野の一角に、遊女たちが競うように男根を奉納するお堂があった。しかし、火災により焼失。唯一残ったのが石製の男根で、現在は小中野のJ寺に奉納されている<sup>63)</sup>。本堂左側のお堂の棚には、男根型の奉納物が2つ安置されている<sup>64)</sup>。その男根を囲むように、丸石や変わった形の石などが、ともに祀られている(2006年8月)。J寺は寛延元(1748)年に大畑村の正津川付近に建立された梅翁庵にルーツがあり、明治43(1910)年に復興された寺院(曹洞宗)である。

### 4 7. 八戸市小中野・新むつ旅館(木製男根)

小中野の花街の中で、唯一当時の姿を保ったままに営業を続ける旅館が「新むつ旅館」(新睦楼)である。遊郭当時から祀られている木製男根には、長さ20cmほどの金色に塗られたものなど計6本があり、現在も神棚の左隅にひそかに祀られている(2006年8月)。

### 4 8. 八戸市諏訪・諏訪神社(木製男根ほか。神体は不明)

小中野の花街からさほど遠くない、八戸市諏訪1丁目にある諏訪神社境内に、「金精堂」と、「金精祠」がある。「金精堂」には、高さ1mほどの男根型奉納物が安置されており、その手前にも木製の奉納物が納められている。また、社殿にも陽石が据えられている。この一帯には巨岩が露出し、社殿も岩山の上に据えられている(2006年8月)。八戸市史編纂室編『〈民俗調査報告書〉小中野地区の民俗—平成十三年度民俗聞き取り調査より—』によると、この神社にコンセイ神が祀られているのは、諏訪信仰でミシヤグチ神として陰陽石を祀ることと関係があるとしている<sup>65)</sup>。

### 4 9. 八戸市十日市・鍛冶山大明神堂「ホウセンサマ」(石製男根)

鍛冶山八幡宮は、八戸市郊外のゆるやかな傾斜地に位置する小高い森の中にある。手前に経つお堂が「大明神堂」で、八大竜王を祀る。ほかに、左手にはオシラサマが1対、左右に石棒が1本ずつ供えられ、いずれもよだれかけが古いものの上に重ねるようにして3枚被せられている。ひとつは「ホウセンサマ」であり、いまひとつは「馬頭観音ではないか」との説明書きが添えられている(2009年10月)。

大明神堂から奥へ石段を登ると右手に石体が2つ、その間に石祠が安置されている。八戸市史編纂室編『〈民俗調査報告書〉大館地区の民俗—平成十二年度民俗聞き取り調査より—』によると、「この石碑を『聖観世音さま』と呼んで拝んでいるが、別名『唸り石』ともいう。それは、昔々この石に観音様が宿っていることを知らずに助次郎家の祖先が踏み台の石として使ったところ、この石が夜になると唸り出したという。そこで家の者が祈祷師にうかがったところ観音様が宿していると言ったので、注連縄を張ってねんごろに祀ったという。その後、助次郎家で農作業の働き手がなくて困っているときに、観音様が一夜のうちに田打ちをしてくれた」との伝説があるという<sup>66)</sup>。

2つある石のうち、左手の石の裏側に、石製の男根(高さ約40cm)が奉納されている。また、唸り石から左手奥の「行屋堂」の内部には、獅子頭が安置され、丸形の男根と思われる形状の石が奉納されている。

堂のある場所の下手には水源地があり、ポンプ小屋がある。その脇に水のわき出る場所があって、白い小さな鳥居とともに祭祀の場が設けられている(2009年10月)。

「難産の時には、この万年泉からわき出る霊水を竹の筒に汲み、途中休まず振り返らず帰り、産婦に飲ませると、



力水となり、お産を軽くするという。そのため金精さまも合祀されている。」ということである67)。

#### 50. 八戸市妙(みょう)・秋葉山神社(木製男根)

秋葉山神社は、2間四方の古色を帯びた堂宇で、祭壇左手に木製男根(長さ約40cm)、その右手にオシラサマが一对、中央に秋葉様、その隣には正体不明の神体が奉納・安置され、一番右手に獅子頭がある。木製男根のほかには、性信仰にまつわるものはなかった(2009年10月)。

ここは野場と石橋の集落の境にあたり、獅子頭をまつり、年に2回の祭日のうちいっぽうの祭日を12月12日としている68)ので、「テンマサマ」の信仰とも関係があるように思われる。

#### 51. 八戸市沢里・白山宮(陽石・陰石)

本殿に陰陽石を祀る。自然石と思われる。また、境内の手水鉢の下に丸石を安置しているが、信仰の対象であるかは不明である(2006年8月)。

#### 52. 八戸市沢里・白山講社(木製男根)不明

昭和初期に書かれた書物には、八戸市南西部の白山(現在は新興住宅地となっている)に「木製リング」を奉納するお堂があり、一般に「コウジンサマ」と呼ばれて、朱塗りの男根像を祀っていたとの記述がみられる69)。この御堂が、前述の「白山宮」であるか、あるいは別のものであるかはわからないが、現在ではそのようなものを祀る神社は、近くに見あたらない(2006年8月)。

#### 53. 八戸市小舟渡<sup>こみなと</sup>・K・G家(石製男根)

K・G家の裏手にあるお堂に、金精様やその他の神仏(お札・掛け軸)を祀っている70)。もとは神棚に祀られていたものを、昭和53(1978)年11月30日にお堂を建立し、移したといわれる71)。

#### 54. 八戸市田代八島・妻の神(男根状自然石)

通称「さめの口」付近の木立の中に、石祠がある。そばには50cmほどの陽石が横たわっており、お産の神様として信仰されてきたという72)。

#### 55. 五戸町古堂・延命寺境内「コーセンサマ」(石製男根・石棒・木製男根)

延命寺境内の一角に「公先堂」(コーセン堂)があり、縄文時代の石棒と思われる長さ1m弱の石製男根から、木製男根まで、複数の男根が奉納されている。これらが以前からここに祀られていたものかは不明である(2008年9月)。

#### 56. 五戸町愛宕(石製男根)

愛宕とよばれる場所は、五戸町の旧遊郭付近にあたる。『郷土趣味』の記述によれば73)、遊郭付近の小山のなかに「長さ三尺二寸、周囲九寸二分」もの巨大な神体があったという。これはもともと近所の畑地から掘り起こされたもので、遊郭に近いという場所柄女性の祈願者が多く、4月2日の祭日以外はご開帳にならなかったそうである。しかし現在、その神体の所在についてはわからない(2008年9月)。あるいは、前述の延命寺にある「公先堂」に合祀されている可能性もある。

#### 57. 五戸町澤(石製男根)

澤地区は、五戸側から高台へ登る旧道沿いの集落である。『郷土趣味』の記述によれば74)、2尺余りの小祠のなかに、1尺9寸の「金勢様」が祀られていて、旧暦2月3日が祭日であったという。現在、それらしきものを祀っているという情報はない(2008年9月)。

#### 58. 三戸町(?)岡山「金玉茎大明神」(陽石)

『雲根志』その他に、「奥州南部領三の戸岡山」に「金の男根」を祀るとの記述がある75)。これを引いて、青森県三戸郡三戸町岡山に金精神がまつられているとする記述が、もろもろの書物に散見される76)。「三戸岡山」という地名が、現在のどの場所を指すのかは不明である。少なくとも、現在の三戸町には岡山という地名は存在しない。『津軽俗説選』には、「三戸郡渋谷といふ所に、森々たる岡山に玉垣かこふ一社あり」とあって77)、岡山を地名と取り違えた誤りである可能性もある。また、三戸郡「渋谷」とは、「渋民(しぶたみ)」の間違いであるとすれば、岩手県巻堀(渋民に隣接する地域)にある、有名な「巻堀大明神」ということにはならないか。

『雲根志』では、陽石を力比べに用いた若者達が瘡の病になったといい、また、「金玉茎大明神」の前を藤原実方が神前を下馬せずに通り過ぎようとして落馬して死んだとの記述があるが、これは『源平盛衰記』に描かれた名取の「笠島道祖神」のエピソードとして有名である。

#### 5 9. 三戸町城下（しろのした）「根清大神」（木製男根）

三戸町在府小路町は、かつて遊郭として賑わいを見せたところである。遊郭の一角にコンセイサマを祀る小祠が残っており、「根清大神」と呼ばれている(2006年8月)。この祠を管理しているのは三戸町で商店を経営するH氏であるが、「10年ほど前に、青森県が主催する企画展で、コンセイサマを一堂に集めて展示した際に貸与したことがあった」という(2008年7月)。この「企画展」は、平成6年に青森県立郷土館が開催した『くらしの中の信仰 青森県の民間信仰展』を指すと思われる。当時の図録(78)には、木製男根3体、石製男根3体、計6体の写真とともに「コンセイサマ三戸町桐萩」とキャプションが付けられている。図録の写真にある男根は、その形態から当物件のものともみてはば間違いない。

かつては社の外に高さ50cmほどの太い男根状の石棒が2本、丸い女陰石もあったようであるが(79)、現在では祠の中にそれらしきものが奉納されている。祠に隣接して「金勢大神」と刻まれた石碑が2つ(1つは明治時代)、祠の内部には鏡を中心にして左右に木製男根が19本、石製男根が2本と、「金勢大明神璽」と書かれた木札が奉納されている(2008年7月)。

#### 6 0. 三戸町同心町・熊野神社（石製男根・木製男根）

境内摂社・手代森稲荷の祠の左側に、高さ40cm、太さ18cmほどの石の御神体が祀られている。手ぬぐいが幾重にもかぶせてある。御神体の手前には、高さ180cmほどの木彫の男根が奉納されている。「木製男根は、10年ほど前に男性の信者が健康を願って自ら彫刻し奉納したもの。石の御神体は、以前は稲荷の鳥居の根元付近にあったものを遷した。だいぶ前からあったようだが、由来はわからない。」(熊野神社・糠部神社神主、Y氏の話。2008年7月)。7月13日が神社の例祭である。

#### 6 1. 八戸市南郷区・高山観音境内「金勢様」（木製男根）

高山観音の境内に祠があって、内部には多数の木製男根が奉納されている(2006年8月)。岩手県の巻堀神社から分霊されたものであるとされる(80)。

#### 6 2. 新郷村川代・コンセイサマ（神体不明）

川代集落の個人宅で、コヤスサマとコンセイサマを祀っており、両者一対として祀ることではじめて安産に効があるという(81)。

#### 6 3. 新郷村戸来・サイノカミ（石）

田中集落に、大小2つの祠があり、楕円形の石が複数祀られているという(82)。

#### 6 4. 新郷村西越後沢（石製男根）

後沢集落中央の高台にある稲荷神社の境内に、自然石の男根を2つまっている祠がある(83)。

#### 6 5. 田子町川代・「森瀧明神」（石製男根）

川代部落から林道をさらに奥に進むと、谷あいの田圃の中にひっそりとたたずむ社があって、「森瀧明神」と呼ばれている。この社は、清水頭部落に住むT・Y家の私社であるという(84)。社殿内部にはさまざまなものが祀られており、左端の祠のなかに、石製の長さ25cm、陰茎部直径6cmほどの石製男根が安置されている(85)。根元には辜丸が附属し、2つあわせて直径18cmほどもある立派なものである。また、石製男根の隣に木製男根が1本奉納されており、こちらは長さ約20cm、太さ約4cmである(2008年7月)。

#### 6 6. 田子町遠瀬・「コウセンサマ」（石製男根）

遠瀬小学校の跡地に隣接する急峻な尾根の上に巨大な岩塊があり、その手前に小祠がまつられ、地元の人から「コウセンサマ」とよばれている。祠の中には石製男根が五つあって、男根そのものの形を模したものは一本(約15cm)。その他はすべて太さ約8から10cm、長さ30cm弱の長い石で、中には磨製石器が折れたとおぼしきものもある。以前は木製のものも多数奉納されていたようであるが(86)、現在はみあたらない。最も新しい木札には平成12年の記銘があ

る。「腰の痛い人など、女の人たちがお参りしていた。それほど盛んではなかった。女の方は祠まで上がってはならないとされ、上がると強い風が吹くといわれていた。S・Sさんという60歳過ぎの人が社を管理していると聞いている。」(T氏75歳、商店経営)「男女関係なく、社まで上ってはならないといわれている。上れば大風が吹くから、誰も上らない。道路から手向けることになっている。もともと、その場所はS・Sさんの家の山であったが、今は手放して町の土地になっていると聞いている。S家は昔は山も土地も多く所有しており、裕福で、とくに働かなくても暮らしていたようだ(遠瀬の老婦人・大正10年生)などの話からもわかるように、おもに婦人の信仰があつく、女性が直接お堂に近づいたり見たりすることは禁じられていたようである(2008年7月)。

#### 67. 名川町剣吉・諏訪神社「コウヘンサマ」(木製男根・石製男根)

諏訪神社は、曹洞宗陽広寺となりに鎮座し、境内の池端にある小祠には「コウヘンサマ」が祀られている。中には大小10本ほどの男根が奉納されており、石製のものは1本のみで、ほかはすべて木製である。「不妊症の女性がよく借りに来た」といわれる<sup>87)</sup>。現在みられる奉納物のなかで一等大きなものは平成12年に男性が奉納したものである。また、祠内に紙の小片が折りたたんであり、中を開くと、数字選択式宝くじの番号と思われるものが書かれていて、性や出産にかかわること以外についての信仰もみられるようである。(2008年7月)。

#### 68. 名川町虎渡・熊野宮(石製男根)

名川町には隣接して2つの熊野神社があるが、中村家の敷地内にある「熊野宮」に男根が祀られている。古くから中村家の敷地内にあるが、宮司をつとめているわけではなく、部落の人が祀っている<sup>88)</sup>。お堂の奥の左手に「子安様」として女性像が祀られ、その左隣の厨子の中に縄文時代の石棒らしきもの(高さ約60cm幅約4cm)が安置されている(2008年7月)。『名川町史』によれば「金精さま」として祀られているとのことである<sup>89)</sup>。

#### 69. 名川町高瀬・「コンジン」(石祠のみ、神体なし)

高瀬集落の宮野部落、O家の畑に石製の小祠が祀られており、「コンジン」と呼ばれている。小祠には「金神」と刻まれている。O家に嫁いだR氏(83歳)によると、「O家でS家の畑を買った際に、S家の畑地に以前から祀られてあった『コンジン』を、S家が自分の土地へ移動させた。するとしばらくして、『根岸のかっちゃん』が首が回らなくなった。(『根岸のかっちゃん』という人は、O家からN家に嫁に行った人のことで、現在は80歳過ぎのおばあさんである。これは彼女がまだ10代後半の頃の話で、60年も前のことだという。根岸とは、N家のある場所のことを指す。)また、『コンジン』の傍にあったご神木を切った人がケガをした。このような禍が続くので、イタコに占わせたところ、『元の場所で祀られたい』とのこと<sup>90)</sup>。また、Kさんという大工が、『コンジン』のために祠を作ったが、O家の土蔵の2階にそのまましまっておいたことも、よくなかったらしい。(Kさんは、O家の家を建てた大工の棟梁で現在85歳である。)そこで、イタコの託宣に従い、元の場所に祀ったのが、現在O家の畑地にある『コンジン』の石祠である。ただし、S家が移動させた御神体(石製男根)は、現在もS家の畑地にある。(このあたりは元々リンゴ畑であったが、現在はサクランボかキク、野菜を植えている。O家でS家の畑を買ったのは、Rさんが嫁にきた頃という)」。また、N鉄工所のNさんによると、「簡単に言えば、神様がエヘだということ。名久井岳の沢に『雨降りじゃ』(じゃわ=沢)という場所があり、そこにも恐ろしい神が祀られている。雨水分神(あめのみくまりのおおかみ)といって、拝めば必ず雨が降る。自分も拝んだことがあるが、その夜激しい雷雨となった。怖くて寝られなかった記憶がある。」とのことで、『コンジン』も『雨降りじゃ』の神も、地域の人々にとって「たたる神」として認知されているようである(2008年7月)。

#### 70. 名川町高瀬(石製男根)

前項において、O家に渡った畑地から移動させた御神体は、S家の畑地に入る細い道路をのぼった右手の石祠のなかに祀られている(2009年10月)。長さおよそ70cmの石製男根で、石棒とみられる。『名川町史』にも記載されている<sup>91)</sup>。

#### 71. 南部町相内・「テンマサマ」(石製男根)

婦人の信仰をあつめる「テンマサマ」が祀られ、山の神と夫婦であるといわれているという<sup>92)</sup>。

### F, 下北(但し、六ヶ所村・横浜町を含める)

#### 72. 六ヶ所村泊・諏訪神社「男と女の神さま」(石製男根)

泊の諏訪神社には、石製の男根が祭られており、「男と女の神さま」と呼ばれている<sup>93)</sup>。本堂の右手に、稲荷、ソウゼンの祠とともに、「金勢社 神体健全子孫繁栄の神」との説明板が添えられた小さな祠があって、その中に安置されている。また、傍らには木製の男根が2本奉納されており、「奉納 金勢神社 明治十三年九月二十八日 願主 敬白」と書かれた布で包まれている(2011年7月)<sup>94)</sup>。

### 7.3. 六ヶ所村尾駈<sup>おぶち</sup>・個人宅「ジンジョコ」(木製男根・木製女陰)

尾駈<sup>おぶち</sup>の個人宅では、6柱の神を祀っており、その中に木製の男根と女陰(「ジンジョコ」)を安置している<sup>95)</sup>。30年ほど前には、1月8日と4月8日に近所の老婆や野辺地町に住む親戚等あわせて7～8人ほどが集まって祭祀をおこなっていた。最近では新暦4月8日にのみ祭りをおこなうようになった<sup>96)</sup>。

### 7.4. むつ市新町・熊野神社境外「コンセイサマ」(木製男根)

旧大畑線の鉄路わきに、傾きかけた鳥居とともに古びたお堂が建つ。新町町会長、K・Y氏によると、300年ほど前から祀られており、その間に6回の建て替えが行われたという。もとの敷地は、昭和14年に国鉄大畑線が開通した際に用地となることが決まったので、昭和10年頃に、あらたな敷地を町内より寄付してもらって移動した。現在のお堂は、昭和56年に宮大工のY・Y氏(新町の「卒塔婆製作所」を経営、田名部まつりの山車も手がける)が建てたもので、堂内に安置される最も大きな奉納物(木製男根)も、Y・Y氏がつくったものである。現在は、内輪だけで例祭を行っているそうである。山伏に書いてもらった木札が奉納されている(2007年4月)。なお、2012年現在、大畑線用地の土盛りは撤去され、移転前の場所に社殿が新築されている。

### 7.5. むつ市恐山・地藏堂(木製男根・石製男根)

もと、恐山菩提寺境内の便所に祀られていたものを移動し、現在は地藏堂へ渡る廊下のトイレ前に陳列してある。さまざまな素材、さまざまな形態の男根が多数奉納されている。以前は、巨大な男根形に赤い着物が供えられていたこともあるという<sup>97)</sup>、現在ではそのような大形の男根形は見当たらない(2006年7月)。

### 7.6. むつ市大畑湊・金勢神社「コウセンサマ」(石製男根・木製男根・石製女陰・ふんどし)

大畑町の旧道沿い、湊村の小高い丘の上に「金勢神社」が鎮座する。本堂のわきに「こうせんさま」の扁額をかかげる小堂があり、岩手県の石材店で制作した巨大な石製男根を中心に、大小さまざまな木製・石製男根が奉納されている(2007年4月)<sup>98)</sup>。文化7年に「天下森」に金精祠が祀られたという記録がある<sup>99)</sup>、『大畑町誌』ではそれがこの「金勢神社」であるとしている。その後大正6年に再建されたのち、昭和49年に再び改築された際、奉納物は10数本を残して床下に埋められたという。また、昭和の初期頃には女性がこぞって参拝し、患部や陰部をさする風景がみられたといわれる<sup>100)</sup>。

現在、お堂のなかには縄文時代の遺物とおぼしきものから自然石まで、数にして30ほどが並べられており、ほとんどが男根型であるが、女陰を思わせるものも混じっている。また、壁面には白布(ふんどし)も奉納されている。このふんどしは、奉納物を借りうけたのち、倍返しする際の選択肢の一つであるという<sup>101)</sup>。

例祭は8月7日で、前日の宵宮は賑わいを見せる。菅江真澄もここを訪れて、往時の七夕のようすを記録している<sup>102)</sup>。

### 7.7. 大畑町小目名・大山祇神社「コウセンサマ」(石製男根)

小目名(こめな)地区の高台に大山祇神社が鎮座する。境内に小さな祠があって(祠は八戸の人が寄進したもの。もこの部落に住んでいた人である)、左に穴の多く開いた、一見女陰を思わせる石体、右に高さ20cmほどの棒状の石体が安置されている。近くのH商店のT・H氏によると、棒状のものが「コウセンサマ」、隣の女陰型のは、じつは女陰ではなく「耳の神様」であるという。本家のM・H氏の妻・I・H氏(81歳)によると、「コウセンサマ」の御神体は、昔、近くの川(小目名川)からあがったものを祭ったと聞いているという。

なお、M・H家では、1対のオシラを祭る。現在は、1月の第3日曜日に親戚一同があつまり、オシラ遊びを行う。最近、久渡寺で金欄のオセンダクを新調してからは、昔のように毎年新しいオセンダクを着せることはなくなったという。オシラ遊びの際も、イタコに祈祷してもらうが、オシラは棚に祭ったままでおこなうとのことである(2007年4月)。

### 7.8. むつ市川内上小倉平・個人宅「コーヘンサマ」(神体不明)

川内町上小倉平(かみこぐらたい) K・I家では、かつて「コーヘンサマ」を祀っていた。K・I氏の息子・N氏

(10年前に他界)の妻・H氏によると、「20年以上前に、青森市郊外の「ダイコクデン」に御神体を奉納して以来、直会には行っていない」という。御神体は箱に入れられ、本体を見たことはないという。また、上小倉平、K・S氏の妻Y氏(75歳)によれば、「K・I家で『コーヘンサマ』を祀って飲食したのは、舅様の世代の話。私らの頃になると、そういった会合は参加したことがない。」という。『川内町史』その他には、上小倉平部落で「コーヘンサマ」を祀る家が数軒あるとの記述がある<sup>103)</sup>が、同部落内T・N氏ほか婦人2人を含め、前出のH氏、Y氏ともに「この部落で、K・I家のほかにコーヘンを祀る家は聞いたことがない」との回答であった(2007年5月)。この部落ですら過去の信仰となってしまったようである。なお『川内町史』によると、K・I家のコーヘンサマの祭日は8月3日で、安産の神として信仰されていたとのことである。

#### 79. 東通村上田屋・熊野神社「オデンマサマ」(獅子頭)

菅江真澄が寛政5年11月27日に訪れ、上田屋部落に「天魔神の祠」があると記している<sup>104)</sup>。この「天魔神の祠」に相当すると考えられるものが、かつてY・N家に隣接する崖下の台地にあった。現在では祠は完全に朽ち果て、見る影もないが、祠の残骸に混じって、天保6年の棟札が埋もれていた(2007年4月)<sup>105)</sup>。上田屋部落会代表・Y・M氏によると、「M・Kさんが亡くなってから、祀る人がいなくなり、K家(屋号をインキョと呼んだ)はむつ市へ引っ越してしまった。K家は、E・N家の隣にある空き地にあった。テンマサマのお堂も荒れるにまかせていたものを、十年ほど前に御神体のゴンゲンサマ(獅子頭)を熊野神社の本殿に遷した。」とのことで、御神体の獅子頭は顔一面に虫食いの穴があいた状態ではあるが、現在は熊野神社本殿に安置されている(2007年5月)。『東通村史』によれば、この獅子頭は「隠居様」と称されていた<sup>106)</sup>。また、祭礼は九月十七日に行われていたという<sup>107)</sup>。集落の老人でもこの祠の存在を知る人はもはや少なく、K・T氏(91歳)によると、「オデンマサマと呼んでいた。私は大正5年生まれ。オデンマサマという名前ばかりで、何の神様か全く関心がなかったので、詳しいことはわからない。」というし、T商店経営の年配の女性2名も、テンマサマという名前すら聞いたことがないとのことであった(2007年5月)。昭和56(1981)年発行の『にっぽんの性神』には、荒れ果てた敷地内の祠に男根形奉納物1本のみがひっそりと祀られている様子が記されており、この頃からすでに忘れかけられた存在となっていたようである。<sup>108)</sup>

#### 80. 東通村砂子又・「オンドウ」(神体不明)

砂子又集落のY・T家の畑にイチイの大木があり、その前に小さな祠が祀られている。Y氏(52才)によれば、『オンドウ』(お堂)と呼んでいるが、私が生まれてからは、祭りをしたのを見たことはない。木の形がちょうど性交をしているように見えるから、子宝の神様として祀っている。」とのことである(2007年5月)。『東通村史』によれば、これはコンセイサマの祠で、神体はイチイの枝をコンセイサマに見立てたもので、3月8日が祭日であるという<sup>109)</sup>。菅江真澄の紀行文にも登場する「円流寺」の住職によると、御堂の存在は聞いたことがないが、この付近は古くは「たたら製鉄」が行われていた場所で、付近を掘ると鉄の塊が出てくることがあるという。「オンドウ」の前にもそれらしき不定形の金属塊が安置してある(2007年5月)。

#### 81. 脇野沢村松ヶ崎・石神社「イシガミサマ」(自然石)

身の丈ほどの岩塊を神体として祀る。『脇野沢村史』によれば、安永6(1777)年に海中から引き上げられ、その後成長を続けたといい、縁結びの神として信仰され、男根型の燭台が奉納され、性的な落書きが多く見られるとのことである<sup>110)</sup>が、現在はそのような落書きも男根型燭台もみあたらない(2007年6月)。

#### おわりに

事例を概観するに、次のような傾向をおぼろげながらつかみ取ることができると思われる。(1)生殖器崇拜の物質的資料が確認できる事例は、青森県内を津軽地域(A, 東青、B, 西北五、C, 中弘南黒)、南部地域(D, 上十三、E, 三八)、下北半島地域(F, 下北、但し六ヶ所村・横浜町を含める)と仮に3区分して比較した場合、圧倒的に南部地域に多い(今回の資料では、全81件中、津軽22件、南部49件、下北半島10件)。(2)「コンセイ」という呼称で男根形を祀る事例の多くは南部、下北半島地域に多く分布し、津軽地域においては比較的少ない。(3)「コンセイ」のように男性生殖器の模造品を奉納するものに「テンマ」と呼ばれる神があり、神体を獅子頭とする事例が複数みられる。これは天神信仰と習合し、「天満宮」と称している場合がある。「テンマ」はおおよそ南部、下北半島地域にのみ分布し、津軽地域にはみられない。(4)縄文時代の遺物である「石棒」を、生殖器崇拜の対象としている事例が、県全域にわたって随所に見られる。

今後は、「コンセイ」をはじめとする生殖器崇拜資料の分布域や、物質的特徴、祭祀の場、担い手、祭礼日、伝承

などについての考察をおこない、青森県における生殖器崇拜の特徴について検討する作業をすすめたい。

また、(4)で述べたように、縄文時代の石棒（石製男根）が「コンセイ」等の呼称で生殖器崇拜の対象として祀られることは一般的な現象であるが、同様の事例が青森県内にも数多く見受けられる。石棒が数千年の時を隔てて、信仰の対象として「再生」する現象について、石棒がいかにして新たな位置をひとびとの生活の中に獲得したのかを考察することによって、ひとびとの心意をめぐる問題へと結びつけることが可能であると思われる。このことは、小池淳一が提示した考古学と民俗学との協業による「男根をめぐる精神史」<sup>111)</sup>を描く第一歩にもつながると考える。

さらに、近年、地域おこしや町づくりに「伝統文化」を活用する動きが活発になっているが、性器型のみこし（木製男根）を運行する祭が、再興あるいは創出される事例を各地に見ることができ<sup>112)</sup>、青森県内においても、従来の信仰のありかたとは異なる意味や目的によって祭祀された男根像が散見される<sup>113)</sup>。こういった現象もやはり、時代を隔てて「再生」する生殖器崇拜の一例として捉えることができるのではないだろうか。

古代から近現代へと至る生殖器崇拜にまつわる栄枯盛衰のドラマを、「男根をめぐる精神史」として描出することを目的として、青森県や東北地方における「コンセイ」をはじめとする生殖器崇拜の生成と展開について考察をすすめていくことを今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿作成にあたり、実地調査に際しましては、多くの社寺関係者ならびに現地の方々にご協力をいただきました。また、大島建彦氏、大湯卓二氏、小池淳一氏、山田厳子氏、西郊民俗の会の方々ならびに青森県民俗の会の方々よりご教示いただきましたことに末筆ながら深く御礼を申し上げます。

## 注

- このことばは、出口米吉が邦訳した『日本に於ける生殖器崇拜』(1919, 原著はエドモンド・バックレー, 1895) や、斎藤昌三が邦訳した『性的神の三千年』(1920, 原著はフレデリック・スタール) において、Phallic Worship やphallicismの邦訳語として用いられたものであり、出口米吉『日本生殖器崇拜略説』(1920)、上田恭輔『生殖器崇拜教の話』(1920) 横山流星『生殖器神の研究』(1921) といったように、日本におけるこの方面の研究の基本書にはごく一般的な用語である。本稿でとりあげる対象（生殖器の形態をとる神体または奉納物が用いられる祭祀）をあらわすのには、「性的神」「性神」よりも、よりの確に対象を捉えていることばであるとも考える。
- 西岡秀雄『日本性神史』高橋書店, 1961, p. 211, 宮田登「性信仰覚書」(『日本民俗風土論』千葉徳爾編, 弘文堂, 1980, p. 312等ではこの社の所在地を「青森県三戸郡三戸町岡山」としているが、三戸町に岡山という地名は現存せず、不明である。
- 菊岡沾涼『本朝俗諺志』二之巻（ただし典拠は、宮武骸骨『猥褻風俗史』（花月増補『猥褻廢語辞彙 付猥褻風俗史』有光書房, 1976, p. 121）に引用された内容による）、木内石亭『雲根志』前編, 卷の一（築地書館, 1969, p. 20）、および工藤白龍『津軽俗説選』（『青森県叢書』第一編, 1951, p. 12）
- 工藤白龍『津軽俗説選』（『青森県叢書』第一編, 1951, p. 11）
- 村林源助『原始漫筆続編年表』卷之七ノ四十（『みちのく叢書』第七卷、株式会社国書刊行会, 1982, p. 159）。これに記される金精祠について、『大畑町史』（大畑町役場, 1992, p. 774）は、青森県むつ市大畑町湊村の金勢神社のことであるとしている。
- 根岸鎮衛『耳袋』（上）（岩波書店, 1991, p. 62-63）
- 菅江真澄『外が浜づたひ』（菅江真澄遊覧記2, 平凡社, 2000, p. 139）、同『津軽の奥』（菅江真澄遊覧記3, 平凡社, 2000, p. 146）、同『雪のもろ滝』（菅江真澄遊覧記3, 平凡社, 2000, p. 293）、同『おがらの滝』（菅江真澄遊覧記4, 平凡社, 2000, p. 217）、同『おぶちの牧』（菅江真澄遊覧記3, 平凡社, 2000, p. 106-107）
- 喜多村信節『画証録』（日本随筆大成 新装版〈第二期〉四, 吉川弘文館, 1994, p. 365）
- 出口米吉『日本生殖器崇拜略説』私家版, 1919, p. 90-91、同『日本性崇拜資料一覧』私家版, 1927, p. 81-82、同『日本性崇拜資料一覧続編』私家版, 1932, p. 35-36、斎藤昌三『性的神の三千年』三徳社, 1920, p. 98-99、また、斎藤昌三『変態崇拜史』（文芸資料研究会, 1926）には青森県内の事例の記載はないが、東北地方を含む各地の事例が豊富に記されている。
- 横山流星『淫神邪教と迷信』二松堂書店, 1919, p. 128-132
- 田中緑紅「性的神行脚」（『郷土趣味』三巻第六号, 郷土趣味社, 1921, p. 50）同「奥羽土俗めぐり」（『郷土趣味』三巻第十二号, 郷土趣味社, 1921, p. 28-36）、斎藤昌三「現存せる性的の神祠」（『郷土趣味』第十七号, 郷土趣味社, 1921, p. 185）

- 13) 西岡秀雄『性神大成—日本における性器崇拜の史的研究』妙義出版, 1956、『日本性神史』高橋書店, 1967など。  
伊藤堅吉『石神の性典』富士博物館, 1964、伊藤堅吉ほか『道祖神のふるさと—性の石神と民間習俗』大和書房, 1972など。
- 14) 田中緑紅「性的神行脚」(『郷土趣味』三巻第六号, 郷土趣味社, 1921, p. 50)
- 15) 三原良吉「こけし婢子雑考」(『旅と伝説』第5年第11月号※昭和7年10月発行, 三元社, 1932, p. 111)
- 16) 天江富弥「こけし道子に就いて」(社団法人日本放送協会東北支部編『東北の土俗』三元社, 1930, p. 136-137)
- 17) 奉納者は「こけし通り商店街」や近隣のホテル経営者である。平成の年号があるものは、大きめのものが16cm、小さめのものが14cm。男根に赤い帽子をかぶせてあるものも散見され、数にしておよそ45本ある。「こけし通り婦人部」が1984(昭和59)年5月10日に奉納したものは、亀頭部が赤く塗られており、高さ30cm、土台のうえに左右にこけし技法でつくられた睾丸が二ヶ付属している。もともとこの道祖神は別の場所にあったものを、昭和のはじめ頃に現在地に移動したという。奉納男根こけしには鳴子観光ホテルやその他商店経営者の氏名がみえる。その中の一本に「岡崎斎の店」と見えるが、これは鳴子温泉で現在もこけし店を営む「岡崎こけし店」のことである。依頼すれば、男根型こけしを制作してもらえる。また、参道入り口には道祖神の碑があるが、近年作られたものである。この道祖神にこけしを奉納する風習については、岩崎敏夫編『東北民俗資料集(二)』萬葉堂書店, 1972, p. 137にも事例の報告がある。
- 18) 岩崎敏夫編『東北民俗資料集(八)』萬葉堂書店, 1979, p. 193
- 19) 従来販売していた「魔除け飴」(製造元: 東洋工芸株式会社・仙台市)は製造中止となったため、「こだから飴」(製造元: 澤山製菓・七戸町)を販売している。
- 20) 内田邦彦『津軽口碑集』(復刻版, 歴史図書社, 1979, p. 137-138)
- 21) 青森市史編集委員会民俗部会編「新城・鶴ヶ坂・岡町・戸門・孫内の民俗」(『青森市史叢書五・民俗調査報告書第五集』, 2003, p. 45)
- 22) 小池淳一「法量権現信仰覚書」(大島建彦編『民俗のかたちとこころ』岩田書院, 2002, p. 414)
- 23) 青森市史編集委員会民俗部会編「矢田・宮田・滝沢の民俗」(『青森市史叢書一・民俗調査報告書第一集』, 2001, p. 84)
- 24) 青森市史編集委員会編『新青森市史』別編3 民俗, 2008, p. 298
- 25) 前掲注20, p. 84
- 26) 前掲注21, p. 297
- 27) 浪岡町史編集委員会(町史編さん室)編『浪岡町史』別巻I, 2002, p. 46, p. 68, p. 104、および同書第四巻, 2004, p. 796-798
- 28) 平内町編『平内町史』続上巻一, 2005, p. 248-249
- 29) 青森県神社庁編『青森縣の神社』, 2002, p. 22
- 30) 平内町編『平内町史』上, 1977, p. 767
- 31) 菅江真澄『津軽の奥』(菅江真澄遊覧記三, 平凡社, p. 146)
- 32) 菅江真澄『外が浜づたひ』(菅江真澄遊覧記二, 平凡社, 2000, p. 139)
- 33) 坂本吉加『津軽の伝説』—(青森県の文化シリーズ二五)北方新社, 1986, p. 28-44
- 34) 原子歴史を語る会『部落漫遊』歴史探訪第六集, 1998, p. 54-55
- 35) 東奥日報「五所川原 前田野目ふしぎ発見①」1999年8月3日付記事
- 36) 「浪岡地方ノ昔コ」(『郷土調査考』特1号, 1973発行, 前掲注25, p. 234-235に所収)
- 37) 鱒ヶ沢町史編さん委員会編『鱒ヶ沢町史』第一巻, 1984, p. 284
- 38) 菅江真澄『雪のもろ滝』(菅江真澄遊覧記三, 平凡社, p. 293)
- 39) 岩崎村史編集委員会編『岩崎村史』下巻, 1989, p. 1237によると、御境明神は佐竹藩と津軽藩の境界に、双方一社ずつ建てられ、現在の国道101号線須郷崎付近から山手へ約2~300mのぼったところに津軽藩側の明神の跡地があるという。また、秋田県側のお堂は現存していて「ホド様」を祀っているという。
- 40) 菅江真澄『おがらの滝』(菅江真澄遊覧記四, 平凡社, 2000, p. 217)
- 41) 森山嘉蔵編著『深浦地方の石塔碑』, 1984, p. 36-37。写真図版のキャプションに「ホド様か? 根清サマか?」とある。
- 42) 『旅と伝説』昭和四年十二月号(二年第十一号)三元社, 1929, 巻頭
- 43) 貞昌寺住職・A氏(六六歳)による。2009年9月1日取材。
- 44) 前掲注40)
- 45) 前掲注3)
- 46) 前掲注5)

- 47) 前掲注 7)
- 48) 十和田市史編纂委員会編『十和田市史』下巻, 1976, p.713-714
- 49) 七戸町史刊行委員会編『七戸町史』一, 1982, p. 417
- 50) お堂の前に、「性信仰と古牧根清大明神」、「淡島明神」、「根清さま物語」という標題を掲げた看板が設置されている。
- 51) 青森県立郷土館『青森県民俗資料図録第三集・青森県の民間信仰』1976, p. 46
- 52) 前掲注 47)
- 53) 前掲注 47)
- 54) 前掲注 47)
- 55) 青森県教育委員会編『青森県祭り・行事調査報告書』2007, p. 84
- 56) 東北町史編纂委員会編『東北町史』下巻Ⅱ, 1994, p. 124-125
- 57) 前掲注 54), p. 151
- 58) 前掲注 54), p. 295, p. 413
- 59) 内田邦彦『津軽口碑集』(復刻版, 歴史図書社, 1979, p. 137)
- 60) 『野辺地事業区第三次樹立事業図 二片の内第一片』による
- 61) 小館衷三『津軽の民間信仰』, 1980, p. 179
- 62) 十和田湖町所蔵『野辺地町之図』
- 63) 小寺隆韶『小中野の花街』縄文舎, 1997, p. 19-20
- 64) 八戸市史編纂室編『〈民俗調査報告書〉小中野地区の民俗—平成十三年度民俗聞き取り調査より—』2005, p. 67
- 65) 前掲注 63) p. 57およびp. 66
- 66) 八戸市史編纂室編『〈民俗調査報告書〉大館地区の民俗—平成十二年度民俗聞き取り調査より—』2004, p. 89
- 67) 前掲注 65), p. 88
- 68) 小井川潤次郎『大館村誌』1959, p. 149および前掲注 65), p.89
- 69) 横山流星『淫神邪教と迷信』二松堂書店, 1919, p. 128-129
- 70) 青森県立郷土館調査報告書・第十三集・民俗六『小舟渡の民俗』調査報告書, 1982, p. 101
- 71) 階上町教育委員会発行『はしかみの民俗と信仰』2003, p. 109
- 72) 階上町教育委員会発行『はしかみの民俗と信仰』2003, p. 109~110
- 73) 田中緑紅「奥羽土俗めぐり」(『郷土趣味』三巻第十二号), p. 33-34
- 74) 同上
- 75) 木内石亭『雲根志』前編, 巻の一(築地書館, 1969, p. 20)、菊岡沾涼『本朝俗諺志』二之巻など。ただし『本朝俗諺志』については、国会図書館、龍谷大学図書館、京都大学図書館などに所蔵されているが、翻刻出版はされていないため、宮武骸骨『猥褻風俗史』(花月増補『猥褻廢語辞彙 付猥褻風俗史』有光書房, 1976, p. 121) 中の引用文を典拠とした。同書によると「奥州南部領三ノ戸岡山の金精神の社は祭神猿田彦の命と云、又弓削道鏡を祀る所也、神体金の男根也、金まら大明神と号す、まらのよはき人立願すれば必験し有、同所笠島に同社あり、……」と記されている。
- 76) 例をあげると、西岡秀雄『日本性神史』高橋書店, 1961, p. 211, 宮田登「性信仰覚書」(『日本民俗風土論』千葉徳爾編, 弘文堂, 1980, p. 312) など。
- 77) 工藤白龍『津軽俗説選』(『青森県叢書』第一編, 1951, p. 12) 「三戸郡渋谷といふ所に、森々たる岡山に玉垣かこふ一社あり。金勢神を祭ると。俗にかなまら明神といふ。男の精分よはりて、左婦円も地黄も杖にならぬ程の者も、神に祈りては厚紙の障子を裂くと、笠嶋の神も同じ誓のよし。」
- 78) 青森県立郷土館『くらしの中の信仰 青森県の民間信仰展図録』1994, p. 22に解説、同p. 30に図版、同p. 52に目録がある。
- 79) 九重京司『につぼんの性神』けいせい出版, 1981, p. 35、および九重京司『性神』トラベル・メイツ社, 1981, p. 71同書掲載の写真は、九重京司氏が国内の性信仰について解説を担当した「性神の館」(栃木県宇都宮市徳次郎)に現在も所蔵・展示されている。
- 80) 「新世紀の糠部三十三観音めぐり、十四、島守高山観音(中)」(『デーリー東北』平成十四(2002)年一月十日付記事)
- 81) 弘前大学人文学部民俗学研究室『新郷の民俗—青森県三戸郡新郷村—弘前大学人文学部民俗学実習調査報告書Ⅲ』p. 213~p. 214



- 82) 弘前大学人文学部民俗学研究室『新郷の民俗—青森県三戸郡新郷村—弘前大学人文学部民俗学実習調査報告書Ⅲ』  
p. 209
- 83) 新郷村史編纂委員会編『新郷村史』1989, p. 114
- 84) 小井田幸哉編『田子町誌』下, 1983, p. 331
- 85) 青森県民俗資料図録第三集『青森県の民間信仰』青森県立郷土館発行, 1976, p. 49にはこの石製男根の写真が掲載されている。
- 86) 小井田幸哉編『田子町誌』下, 1983, p. 210
- 87) 名川町史編集委員会編『名川町史』第二巻本編Ⅱ, 1995, p. 950
- 88) 中村家当主の話 (2008年7月)。
- 89) 名川町史編集委員会編『名川町史』第二巻本編Ⅱ, 1995, p. 951
- 90) B氏の話では、元の場所で祀ることになったのはイタコの託宣があったためだということであるが、名川町史編集委員会編『名川町史』第二巻本編Ⅱ, 1995, p. 950では、O家の家人の夢枕でお告げがあったと記されている。
- 91) 名川町史編集委員会編『名川町史』第二巻本編Ⅱ, 1995, p. 950
- 92) 南部町史編纂委員会編『南部町史』下巻, 1995, p. 216
- 93) 六ヶ所村史編纂委員会編『六ヶ所村史』下巻Ⅱ 1997, p. 455-456
- 94) 2011年7月12日に確認
- 95) 六ヶ所村史編纂委員会編『六ヶ所村史』下巻Ⅱ 1997, p. 457
- 96) 2011年7月12日、木村喜代江氏に聞き取り。
- 97) 夏堀正元「死者の魂寄り合う聖域」(『青森県暮らしの歳時記』東奥日報社, 1991)
- 98) 石製のものは、中央に鎮座する岩手県某石材店製作の高さ103cm直径32cmを筆頭に、高さ22cm直径11cm、高さ37cm直径11cm、高さ19cm直径9cm、高さ25cm直径15cm、高さ30cm直径11cm、高さ42cm直径13cm、高さ25cm直径8cm、高さ23cm直径14cm、高さ12cm直径8cm、高さ20cm直径11cm、高さ13.5cm直径8.5cm、高さ50cm直径17cm、高さ24cm直径11cm、その他高さ10cm直径6cm程度の小石複数がある。また、木製のものは、高さ23cm鞞丸部幅14.5cm、高さ15cm直径4cm四(黒塗り)の2本が奉納されている。女陰を思わせる高さ13cm幅13cmの石(赤色)も奉納されている。(2009年5月25日調査)
- 99) 村林源助『原始漫筆続編年表』巻之七ノ四十、文化七年庚午の項(みちのく叢書第七巻, 国書刊行会, 1982, p. 159)
- 100) 工藤睦男編『大畑町史』大畑町役場, 1992, p. 774-775。また、『下北半島北通りの民俗』(青森県史叢書, 2002, p. 163)も金勢神社の創建を文化七年としている。
- 101) 岩崎敏夫編『東北民俗資料集(二)』萬葉堂書店, 1972, p. 134-135
- 102) 菅江真澄『牧の朝露』(『菅江真澄遊覧記3』, 平凡社, 2000, p. 81)
- 103) 川内町史編さん委員会編『川内町史 民俗編・自然Ⅰ(気象、地形地質)編』1999, p. 699、および青森県立郷土館調査報告書 第29集 民俗14『川内町上小倉平・下小倉平の民俗 調査報告書』, 1991, p. 83
- 104) 菅江真澄『おぶちの牧』(『菅江真澄遊覧記3』, 平凡社, 2000, p. 267)
- 105) このままでは棟札も風雨に朽ちてしまうので、熊野神社境内の祠に納め、その旨上田屋部落会代表に伝えた。ちなみに菅江真澄は『おぶちの牧』で「宝永(1704~1711)のころ納めた札にある、左藤次郎と書いた名なども、今の世の人ともみえない。」(前掲注102)と書き記している。
- 106) 東通村史編集委員会編『東通村史』民俗・民俗芸能編, 1997, p. 267
- 107) 東通村教育委員会発行『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第一集) 東通村入口・上田屋・蒲野沢』, 1980, p. 75
- 108) 九重京司『にっぽんの性神』けいせい出版, 1981, p. 37
- 109) 東通村史編集委員会編『東通村史 民俗・民俗芸能編』1997, p. 266
- 110) 脇野沢村史調査団編『脇野沢村史』民俗編, 1983, p. 498-499
- 111) 小池淳一「性と性—考古学との協業への素描—」(『東北民俗学研究』第7号、東北学院大学民俗学O B会, 2001, p. 15)
- 112) たとえば、新潟県魚沼市堀之内地区の「雪中花水祝」は明治7年に廃止のち昭和63年に再興。新潟県栃尾市の「ほだれ祭」は昭和57年に創始、神奈川県「かなまら祭」は昭和52年に再興されている。岩手県遠野市の「遠野まつり」では、「勢組(いきおいぐみ)」が男根形御輿を作り、平成2年から参加している。ほかに大沢温泉「金勢まつり」は昭和40年代に創始されたものであり、宮城県白石市の「斎川道祖神社例祭」でも男根御輿の運行をおこなうなど、各地で昭和後期~平成に創始あるいは再興された男根形(みこし)の運行が見られる。

- 113)たとえば、五所川原市「津軽富士見ランドホテル」の巨大な木製男根像、三沢市「古牧温泉」の石製男根・女陰像、青森市「ねぶたの里」の男根像など、これらはいずれも、これまでの信仰のありかたとは別の意味であらたに創設あるいは他の場所から移動されたものであると考えられる。